

書評

上田信 著

『シナ海域 蜃気楼王国の興亡』

(講談社、二〇一三年)

蔵持 重裕

またまた上田信氏が私たちを楽しませてくれた。

上田氏は、八年ほど前に「中国の歴史」の一つとして、『海と帝国 明清時代』(講談社 前著と示す)を著された。その冒頭で「時間軸のなかに位置づけられていた地域格差は、同時代的な関係のなかに位置づけられるようになった。ウォーラーステインは、時間軸から空間軸への視点の転換を手がかりに、世界史を組み替えようとした」(一七頁)と、ブローデルとウォーラーステインの先進性を紹介し、触れた。これを受けて氏は、「帝国と海との関係に着目することで、海を通じて中国と結ばれていた日本や東南アジア、そしてヨーロッパとの同時代性に常に意識をむけ、ユーラシアの歴史を共進的なものとして描くことが可能となるで

あろう」(一七頁)と、中国史としては異彩を放つ前著を公にしたのであった。名著と云うべきであろう。

本書『シナ海域 蜃気楼王国の興亡』はその外伝、番外編と称しても決して失礼ではないであろう。事実、氏はあとがきで「シナ海域で活躍した人物の評伝を書きたい、そう思い立ったのは講談社から『中国の歴史』の一冊として『海と帝国』を上梓した直後である。〔中略〕執筆が進むにつれて、この本の中で取り上げた人物の生き様を描きたいのに描けない、というフラストレーションがたまった」(三三九頁)と述べている。そしてその思いの丈を込めた論述、それが本書であるからである。

その思いに内包された本書の課題はなにか。それは西欧とは異なる東アジアの近世社会の有り様、つまり近代への「国家の成立」の特質を問おうとするものである。(二二頁) 私にはとてつもなく難問に思える。それだけに氏は情熱と共に、巧みな技を駆使したのである。それはつぎのような手法に示されている。

第一に、世界史を「世界が海を介してつながりはじめたところ」の一五四一年で輪切りにすることである。(一七頁) 第二は、シナ海域に「蜃気楼国家」という「王国」を解答の補助線としてひいてみるというアイデアである。

第三に、その「王」の多様な呼称を「標識」ととらえ、生の人物像に近い「標識」を確認し、それで叙述を通した。第四に、「王」＝彼らに関する一通の文書を取りあげ分析する。これは歴史学としての常道であるが、一通の文書の重みと面白みを説いてくれるのだ。

王国のまず初めの治者、登場人物は日本の室町幕府三代將軍足利義満である。

【第一章 足利義満と法悦の王国】

出身 一三五八年 足利義詮の將軍息として京都で出生、名は源義満

史料 一四〇一（応永八）年 明朝皇帝宛書簡

義満のねらい、明朝が支配する中国財貨を、シナ海域・瀬戸内海を通して京都にもたらし、その振る舞いで權威を高め、自分の感性に根ざす王国を創ることであった、とする。

ここでの成果は、義満の「日本国王源道義」の意味を、南京政權のクーデター状況の中で明朝皇帝から与えられた「降つて」きたものである事を示したこと、また、義満の明使節への尊厳な態度など、従来とは異なる見解を示してくれたことである。また、懷良親王と『明実録』の「良

懷」との異同について、「良懷」は懷良・良成親王の合成による西海域で汎用性のある擬人格とする見解も興味深いし、明でも日本でも交易の実際の担い手は皇帝・將軍側近であった、とされたことも理解できる。

【第二章 鄭和とムスリムの帝国】

出身 一三七一年 雲南 ムスリム系の馬氏、名は和史料 永楽三（一四〇五）年先祖「石碑」とそれへの永楽九年の「遂刻」

和は永楽三年から七回の遠征をしたが、（一二四二頁）「南シナ海域の秩序を創るという明確な目的の下で、和にとつて好ましいと思われる現地の政治勢力を支援し、それと矛盾する勢力を駆逐し」、「交易の拠点となる港市に、信頼できる中国ムスリム系を長官として配置した」。つまり「ムスリムの帝国を南シナ海に創る、それが和の描いていたヴィジョンであった。」

前章同様、皇帝・將軍側近の宦官と同朋衆の相似の指摘はおもしろい。朱棣の南海遠征の野望、夢に火をつけたのは和ではないかという想定も興味深いが、今後どれだけこれに説得力を強められるかが課題であろう。そして、石碑文の背景と意味を先のヴィジョンのように解き明かしたことは、まさに本章全体の考察の賜であり、和の人物像を髣

髯とさせる。

【第三章 王直と海洋商人の王国】

出生 一六世紀前半 明、徽州盆地 名は王鉅きょ

史料 王直上疏

「大内義隆の自害ののちに途絶した勘合貿易を、自身の斡旋によって大友義鎮を日本側窓口として一本化、中国に対しては、同郷であり徽州商人とも人的ネットワークを有する胡宗憲の後ろ盾を得て日本との交易を公認させる。そして自らはその武装船団の威力によって海上の治安を維持し、日明交易の利益を独占する。交易から得られる利益で海上の武装船団を養い、シナ海域に一個の海上政権を構築する」（二〇二頁）のが王直の狙いであった。

ここでの成果は、何と言っても倭寇像を刷新したことであらう。新しい倭寇像は本書全体の成果でもある。とりわけ内陸で活動する倭寇の具体的な軍事行動を明らかにし、本質的には海洋商人の戦争サポーターと日本人軍事顧問団の立案した戦略に基づいた、目的を持った戦闘であると示したことである。（一八六頁）私は、倭寇は一種の「足軽状況」Ⅱ雑兵による白兵戦が戦闘の決定力状況、と見ているが、氏はより組織だった姿を示してくれた。ただし、陸に上がった倭寇に将来があったか。

本章は魅力的な叙述だけに、王鉅と徐海の違いを、徐海の「無頼の性格」で説明出来るか。王鉅と蔣洲の面会と交流は魅力的シーンで、対面会談の力と妙を信じたいが、長年の対立が会談で解消されるのか、『蔣洲伝』の記事をそのように受けとめて良いかが気にかかる。

【第四章 小西行長と神の王国】

出生 一五五八年 堺商人、小西弥九郎

史料 内藤忠俊より兵部尚書石星あて一五九五年請願書 朝鮮戦争の講和を成して、秀吉冊封のあと、沈惟敬を介して江南の商人ネットワークと連携し、日中間の直接の交易を行う。対馬をハブとし、朝鮮半島の熊川、行長領内の八代、瀬戸内海を経て堺、さらにシナ海をはさんで中国の浙江省寧波や福建省漳州などを結びつけ、広くシナ海域を覆う。秀吉の死を待って、この交易圏における宣教師の布教活動を認める。（二六二頁）これが弥九郎のヴィジョンであった。

ここでも、日本史に関わる成果を確認できる。秀吉の豊臣姓の創出が朝鮮侵略の直前、国外からの視線を意識したものであることを示したこと。（二一八頁）

同時に、父対弥九郎、秀吉対行長、オルガンチーノ対アゴスチノ行長という三つの矛盾を、明の沈惟敬との出会い

によって、東シナ海中国交易に活路を見だし、朝鮮との戦争を収束に導く、という構想は面白く、スケールの大きい話であるが、そのまま小西の人物像としてどう取り結ぶかが難しい。つまり叙述は、実際には、弥九郎の商人としての側面を大きく描いているのではないか。(二四三頁) 関連して、行長の誤算とされる秀吉の領土欲望の深さとの矛盾だが、行長自身の商魂の野望とは完全に対立するものであろうか。(二六〇頁)

【第五章 鄭成功と未完の海洋王国】

出生 一六二四年 長崎平戸 名Ⅱ鄭森

史料 一六五六年 布告

シナ海域に、スペイン、オランダが勢力を伸ばす中で、革命により清朝が北京に起こった。鄭森は疎開の明朝にくくことを決意し、思明州(廈門)を拠点にして、軍や軍艦を編成して清と戦うも破れ、ついに拠点を台湾に移し、オランダとの二年の戦闘の末、講和条約を結んでこれをくだした。

ここで興味深いのは、鄭政権が五大商という問屋組織を持ち、陸、海それぞれのネットワークに乗せて、交易を展開させて財政を賄っていたこと、その活動は直接交易をするのではなく、商人への投資・貸与、利子収入という信用

経済の展開であったことである。

そして、上田氏は一六六二年講和条約を中国人初の外国との対等条約、と評価した。氏は森には華夷意識がなく、オランダ人を対等とみていたとするが、その積極的な説明があるわけではない。しかし、こうした企業活動に合理的発想の基礎があったのだと思う。また、タイオワン人民救済という対オランダ戦争の大義と森の本音はどうか、やや気になるところである。

【終章 蜃気楼王国の終焉】

「西欧では国際法の下で、たがいに主権をみとめあい、相手の国の内政には干渉しない、という原則を立てることで、国民と国土とが確定された近代国民国家が形成されてくる。これにたいしアジアでは、それぞれの国が港町を管理し、人民と異人が直接に政治的な交渉することを禁じ、海の向こうに出た人々を切り捨てることで、版図と人民の範囲を確定した。それは西欧とは成立ちは異なるものの、近世的な世界であった。」、「アジアの近世は、海洋王国を蜃気楼のままで終わらせ、その可能性を葬ることで、始まったのである」という。そして、蜃気楼王国が海洋王国にまで発展し得なかったのは、海という自由な世界を拘束できなかったこと、とする。ここからは、蜃気楼王国も陸の王

上田信 著『シナ海域 蜃気楼王国の興亡』（蔵持）

国も共に、海・の・自由・に勝てなかったことが読み取れるが、国家の特性としての一権力の下での民への平等の強制Ⅱ拘束、の海上での不可能性と把握しておきたい。

本書は視点を変えると、「倭寇」の目からの書」と言っても良いかと思う。そして、その見方をすれば、「倭寇」を陸の王国が線引をして切り捨てると言うことになる。やはりこれも、視点を変えたと、「倭寇」の必要性がなくなつた、その存在理由がなくなつたと解されよう。諸英雄はその狭間に生きた。とすれば、近世は、陸の農業生産の安定と、人民が暴力的な問題解決と闘技的文化の過剰に飽いた状況の中で、これを統制できる統一政権に、権力に被統治者への平等性を委託することで生まれたのでは、と考える卑見を、歴史学が人物を描く難しさに果敢に兆まれたことに敬意を表させていただきたい。

以上、日本中世の村の姿を追う小学徒には扱いかねるスケールで、見当外れの感想になったと危惧するが、あえて記させていただいた。

（本学名誉教授）